

日本語・中国語における仮定表現の対照研究：日本語の「たら」「なら」とそれに対応する中国語の形式を中心にして

李, 慧

<https://doi.org/10.15017/1522373>

出版情報：Kyushu University, 2015, 博士（比較社会文化）, 課程博士
バージョン：
権利関係：Fulltext available.



要 旨

20世紀初頭より「假定表現」に関する研究が、日本語、中国語それぞれについて行われ、数多くの成果が蓄積されてきた。しかし、両言語間の具体的な対照研究はほとんど行われていないのが現状である。そこで本研究は、構文および意味の観点から「假定表現」の全体的特徴をつかむことを目的とする。さらに、認知意味論の視座から日中両言語の「假定表現」の機能拡張や対応関係の分析を試みた。

本研究では、主に『中日対訳コーパス』から用例を収集し、日本語の假定形「たら」「なら」の用法を分析することで、それぞれの機能を明らかにした。次に、中国語の假定表現を収集し、「假定標識」「準假定標識」「次假定標識」に分類した。さらに、機能拡張、文法化、「背景化・前景化」の視点から両言語の「假定表現」の具体的対応関係について明らかにした。

本稿の構成は全9章から構成される。

第1章～第3章では本研究の目的、先行研究、データと研究方法について詳述した。

第4章では、両言語の假定表現の構文上ならびに意味上の特徴を論述した。まず、両言語の假定表現の構文上の特徴を観察した。日本語には主に「順行型」と「逆行型」の二種類が、中国語ではこの二種類以外に、「無標識型」、つまり接続表現を使用しないタイプが存在している。次に、両言語の假定関係を表す接続表現の意味上の特徴について説明した。両言語ともに假定表現は「接続関係」および「継起関係」を表すことが共通点であるとの知見を得た。

第5章は、機能拡張の視点からの分析である。認知言語学での「意味拡張」の定義を参照しながら、「機能拡張」という用語を提案し、文法形式の多義性を分析した。まず、日本語の「たら」「なら」の機能拡張とそのプロセスについて検討を行い、これらの表現が假定関係を表す接続助詞という機能から、終助詞的機能、提題機能等に拡張していくプロセスを示した。また、中国語については、非接続表現が接続関係を表すようになるという拡張機能を辿っていき、機能拡張の程度により「假定標識」「準假定標識」「次假定標識」の三種に類別できることを示した。最後に、日中両言語の假定表現に関する機能拡張の異同を明示した。

第6章では、日本語・中国語の假定表現の文法化について詳しく考察した。まず、指示詞と假定表現との文法化を対象とした分析を行い、日本語において「そうしたら」「それなら」などの指示詞を含む接続表現が成り立つのに対して、中国語では接続機能と指示機能とを同時に備える準假定標識“那”“那么”が存在していることが明らかになった。

第7章では、第6章と同様の観点－文法化－から話題提示機能と接続機能を兼ねる日本

語「なら」と中国語“的话”におけるそれぞれの文法化プロセスを確認した上で、「(の)なら」構文と“如果(说)……的话,……”構文の対照を行った。結論として、「なら」と“如果……,……”構文、「のなら」と“如果(说)……的话,……”構文が対称関係をなすことを論証した。

第8章では、「前景化」と「背景化」の観点から考察を行った。この観点から、日本語「そうしたら」「そしたら」と中国語“那”“那么”それぞれの間の差異を明らかにした。日本語「そうしたら」には指示詞「そう」の性格が残っており、前文への意識が「そしたら」より強いことがわかる。その一方で、「そしたら」は「たら」の接続機能を強く残しており、前文の内容を「背景化」し、後文の内容を「前景化」する働きを有する。この観点から、「そしたら」の継起性が「そうしたら」より強いことを実証した。一方、中国語“那”“那么”も相似の様相を呈する。“那”は指示性と接続性を備えるが、相対的に指示性が強い。これは“那”の指示対象たる前文を後文に持ち込むことで、前文を「前景化」していると推測される。また“那么”は「そしたら」と類似しており、接続性が強いことが実際の例文から跡付けられた。

終章たる第9章では、本研究のまとめと今後の課題について述べた。

本研究では、先行研究を踏まえた上で、主として対照分析的観点から、日本語・中国語の仮定表現の類型や機能を明らかにした。またその結果に基づき、両言語における仮定表現における機能拡張の相違を示した。さらに、指示表現との関係についても、前景化・背景化という観点から詳細に分析することで、その対応関係を新たに解明することができた。